KATE Newsletter

関東甲信越英語教育学会
編集委員会

No.121 March 10, 2025

都留文科大学

CONTENTS

[特集：関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会大会報告]

お礼の言葉「久しぶりの対面大会を無事に終えることができ，感謝申し上げます。」
（研究大会実行委員長 浅見道明先生） ------ 2

研究大会１日目

研究発表・実践報告を行って　その１　発表領域：文法　（尼寺圭悟先生）------- 4

講演を行って　（根岸雅史先生） ------ 5

研究大会２日目

研究発表・実践報告を行って　その２　発表領域：ICT　（姉﨑達夫先生）------- 6

研究発表・実践報告を行って　その３　発表領域：ICT　（小林良裕先生）------- 7

研究発表・実践報告を行って　その４　発表領域：指導法・授業実践　（藤原　剛先生）------- 9

授業実践報告（小学校）を行って　（相川美登利先生）------ 10

授業実践報告（中学校）を行って　（小林雄飛先生）------ 11

授業実践報告（高等学校）を行って　（田中知聡先生）------ 12

学会企画を行って　（鈴木駿吾先生） ----- 15

[研究大会プログラム（概要）] ---------- 17

[協賛・広告掲載企業一覧] ---------- 18

[全国英語教育学会　第 49 回福岡研究大会　課題研究フォーラム報告]---------- 19

[研究推進委員会報告]

第 24 回 英語教育「なんでだろう？」座談会　（報告：伊藤泰子先生） ----- 20

[研修企画委員会報告]

７月月例研究会　エデュテインメントが変える日本の英語教育
～英語を諦めていたすべての日本人が言葉の壁・心の壁を打ち破る！～
（発表・報告：山中裕斗氏） ----- 21

12 月月例研究会　公立中学校における生成 AI を活用した英語意見文指導の充実
（発表・報告：彦田泰輔先生） ----- 23

12 月特別講演会　AI 時代に英語教師の存在意義はあるのか？―認知言語学の視点から―
（発表・報告：町田　章先生） ----- 24

関東甲信越英語教育学会日誌 ---------- 26

編集後記 ---------- 27

特集：関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会大会報告

「久しぶりの対面大会を無事に終えることができ，感謝申し上げます。」

山梨研究大会実行委員長
浅見道明（都留文科大学）

関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会は山梨県の富士山の麓にある公立大学法人都留文科大学で 2024 年 8 月 17 日（土）と 18 日（日）に行われました。久しぶりの対面開催にもかかわらず，大きな事故もなく，無事に終了できたのも会員の皆さまのご協力があったおかげと感謝しております。

私は関東甲信越英語教育学会では副会長と理事長を何年か務めさせていただきましたが，学会に対してあまり貢献ができていなかったと反省をしておりました。そんな時，都留文科大学に移って 1 年目の英文学科会議で，学科長から「周辺の先生方に都留文科大学を見ていただく機会を設けられませんでしょうか。」というお話があり，私が「関東甲信越英語教育学会の研究大会を大学で行うのはいかがでしょうか。」と答えますと，皆さんが賛成してくださり，その話を学長と事務局長に持って行くと，お二人とも大賛成で，大きなご協力を得ることができました。

都留文科大学に移って 1 年目のことでしたので，山梨県のことがよくわかっておらず，もう一人の山梨県理事の三枝幸一先生に相談しますと，すぐに中学校英語研究部会長の知見晴弘先生をご紹介いただき，小学校と中学校と高校の授業実践報告をしてくださる相川美登利先生（都留文科大学附属小学校）と小林雄飛先生（山梨県市川三郷町立六郷中学校）と田中知聡先生（山梨県立甲府昭和高等学校）をご紹介いただき，3 名とも快くお引き受けいただきました。いえ「快く」と言うよりも，それぞれの校長先生がよい経験になるからと勧めていただいたというのが正直なところです。おかげである学校種では大会参加を出張扱いにしてくださり，代休も取れるよう取りはからっていただき，山梨はなんと協力的な県かと感心してしまいました。

さて，大会の中身ですが，講演を東京外国語大学の根岸雅史先生に『「知識」「技能」「思考・判断・表現」の評価』というタイトルでお願いできました。かねてから先生のご著書で「宣言的知識」と「手続き的知識」のうち，宣言的知識ばかりを評価し，生徒がその文法事項を実際に使えるかどうかわからないという話を読み，共感を覚えていました。先生には望み通りのご講演をいただき，あの場にいた者全員にとって参考になるお話であったと確信しております。

小学校の授業実践報告では相川先生に「都留文科大学附属小学校の専科教員による Jolly Phonics を使った英語指導」というタイトルで，実際に附属小学校で行われている Jolly Phonics の指導をご披露いただきました。

中学校の授業実践報告では小林先生に「即興的なやり取りを中心とした授業」というタイトルで，普段小林先生が ALT と行われている，生徒とのやり取りがたくさんある英語指導をご披露いただきました。

高校の授業実践報告では田中先生に「教科書を使って生徒のやり取りを促す指導」というタイトルで，田中先生が普段行われている，声がけしながら生徒の発話を根気強く待つ先生の授業をご披露いただきました。

学会企画では早稲田大学グリーン・コンピューティング・システム研究機構次席研究員の鈴木駿吾先生に「対話指向英語スピーキング能力自動判定システムの開発」というタイトルでご講演をいただきました。

自由研究発表は，不便な場所にある大学で申し込みが少ないのではと心配しておりましたが，実際には 43 件の申し込みがあり，大成功となりました。また，研究大会の 2 日間にわたり，延べ 210 名の方々にご参加いただきました。

そして，久しぶりの対面開催で協賛企業の参加が心配でしたが，15 社に協賛いただき，こちらも大成功だったのではないかと考えております。

裏方のお話ばかりになってしまいましたが，今後の大会運営に参考になればと思い書いてみました。大会のおかげで，山梨のことを何も知らなかった私にもたくさん知り合いができました。大会担当も悪くないなとつくづく思っております。今後も関東甲信越英語教育学会の研究大会が末永く続いていかれることを期待しております。

私事ですが，教員としてのキャリアもあと数年で終わりとなりますが，最後の最後で長くお世話になった学会に貢献できたことをたいへん嬉しく思っております。

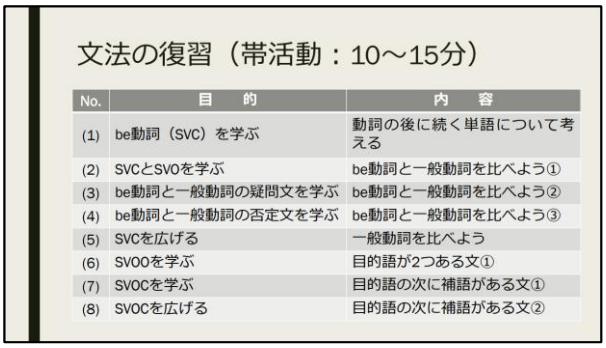
◇研究発表・実践報告を行って◇

その１　発表領域：文法
題目「英語の基礎を固める帯活動の試み
　　―DDL を利用して―」
発表者：尼寺圭悟先生
　　（千葉県千葉市立おゆみ野南中学校）
　　西垣知佳子先生（千葉大学）
報告者：尼寺圭悟先生
　　（千葉県千葉市立おゆみ野南中学校）

本発表では，帯活動として DDL (data-driven learning) を活用して，英語の基礎を固める指導を行った効果について報告しました。DDL は，コーパス（言語データ）を用いて外国語を学習する方法で，Boulton and Vyatkina (2021) によると，“the use of corpus tools and techniques for pedagogical purposes in a foreign/second language” (p. 68) と定義されます。DDL では学習者がコーパスを観察し，自分自身で言葉の規則や使われ方に気づいて学んでいきます。DDL によって，教師主導型の学びから学習者主導型の学びへと，学習スタイルを変換することができ，学習者の主体的で探求的な学びを引き出します。

本研究には，公立中学校 3 年生の 2 クラスの生徒が参加し，1 つのクラス（26 名）はペーパー版 DDL で，もう 1 つのクラス（30 名）はペーパー＋Web 版 DDL を用いて，文法の総復習を行いました（図 1）。指導の効果を検証するために実施したプレテスト・ポストテストには，文法テストを用いました。このテストでは，日本語を見て英語に直す問題を 11 問，5 文型の文構造や be 動詞と一般動詞の違いが分かっているかを問う問題を出題しました。また，ポストテスト後に意識調査を実施しました。意識調査では授業で行った文法の学習活動について答えてもらうために，6 択式で 11 問，記述式で 2 問作成しました。

文法テストの結果を図 2 に示します。プレテストの結果では 2 クラスには，統計的に有意差はなく，同程度の英語力を有していました。次に，プレテストとポストテストの結果は，ペーパー版 DDL クラスでは，平均点が 6.42 から 7.50 に，またペーパー版＋Web 版 DDL クラスでは，5.70 から 7.13 に得点が上昇し，二元配置分散分析の結果，テストの主効果（対応あり）は統計的に有意であることが確認されました。そこで，多重比較を行ったところ，ペーパー版 DDL のクラスとペーパー版＋Web 版 DDL のクラスのいずれも，プレからポストへの得点の上昇が有意であり，効果量は大でした。一方，指導法の主効果（対応なし）と交互作用は統計的に有意ではありませんでした。その結果，指導方法の違いよる指導効果の差は確認できませんでした。


文法の復習（帯活動：10～15分）

No.	目　的	内　容
(1)	be動詞（SVC）を学ぶ	動詞の後に続く単語について考える
(2)	SVCとSVOを学ぶ	be動詞と一般動詞を比べよう①
(3)	be動詞と一般動詞の疑問文を学ぶ	be動詞と一般動詞を比べよう②
(4)	be動詞と一般動詞の否定文を学ぶ	be動詞と一般動詞を比べよう③
(5)	SVCを広げる	一般動詞を比べよう
(6)	SVOOを学ぶ	目的語が2つある文①
(7)	SVOCを学ぶ	目的語の次に補語がある文①
(8)	SVOCを広げる	目的語の次に補語がある文②

図 1：DDL を用いた授業の概要

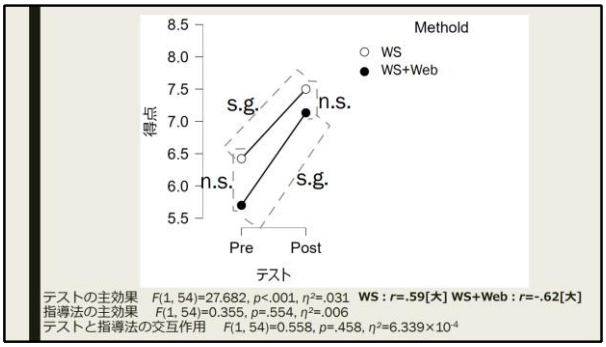


図 2：文法テストにおけるプレテストとポストテストの比較

また，意識調査の結果から，生徒が DDL について良いと考えたことは，集中できること，自分のペースでできること，文法学習に役立つことの 3 点であることが分かりました。

以上のことより，文構造の理解を促進する復習活動を，DDL を用いて帯活動で行うことで，文法力は向上することが分かりました。よって，中学生を対象に，文法の総復習を，DDL を使って行うことで文法知識が促進され，ペーパー版 DDL とペーパー版+Web 版 DDL は，どちらも中学 3 年生の文法力の向上に効果が得られると言えます。

最後になりましたが，このような貴重な発表の機会をくださった関係者の皆さま，本研究発表をご覧いただいた先生方に心よりお礼申し上げます。

引用文献

Boulton, A., & Vyatkina, N. (2021). Thirty years of data-driven learning: Taking stock and charting new directions over time. *Language Learning & Technology, 25*(3), 66–89.

◇講演を行って◇

題目『「知識」「技能」「思考・判断・表現」の評価』
講演者・報告者：根岸雅史先生
（東京外国語大学）

現行の観点別評価は第三世代に当たるもので，二度の改訂を経て現在の形式に至っている。従来の 4 観点から「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点に変更された。これにより教科間での共通解釈が可能になったが，教科ごとに個別の解釈が必要となった。特に混乱が起こっていると思われるのが，定期試験の各大問がどの観点に該当するかである。評価の方法は，中学であれば，「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料中学校 外国語」に示されているが，実際にはこの資料を十分に理解せずに評価を行っていると思われるケースが多い。

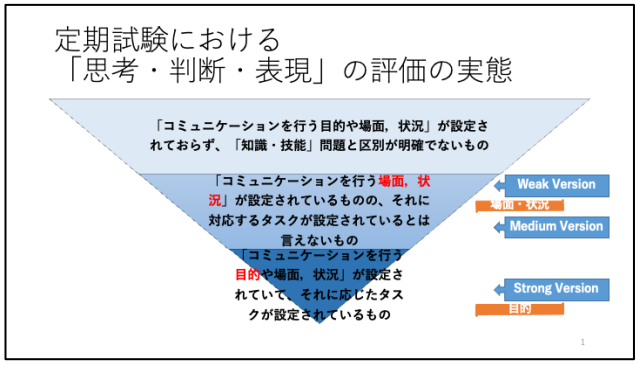


図 1：「思考・判断・表現」の評価の実態

「思考・判断・表現」の評価では，「コミュニケーションの目的・場面・状況」（以下，「目的・場面・状況」）に応じた評価が求められるが，定期試験ではこれが十分に実践されていない場合が多い。テスト問題が「思考」や「判断」を評価しているように見えても，実際には「参考資料」の意図とは異なる場合がある。以前の私の調査では，定期試験問題の 9 割が「目的・場面・状況」が示されておらず，1 割が「目的・場面・状況」は示されているが，それに応じたタスクは設定されていなかった。「目的・場面・状況」が示されていて，それに応じたタスクが設定されている問題はごくわずかだ。

「目的・場面・状況」に応じているかは，別の「目的・場面・状況」を設定して，タスクの結果が違ってくるかを確認してみるとよい。

こうした混乱の原因の一つとして，「参考資料」で推奨されている「思考・判断・表現」の評価方法と教科書におけるタスクとの乖離がある。教科書の中には，「目的・場面・状況」が設定されていないタスクや，「目的・場面・状況」が設定されていても，それに応じたタスクとなっていないものがある。こうした場合は，「参考資料」で推奨される評価方法と授業の活動に乖離が生じ，「指導と評価の一体化」が実現しないことになる。この根底には，検定教科書が実質的に完成した後に「参考資料」が公開されているという問題がある。

図 2：学習指導要領の施行の流れ

「知識・技能」の評価では，「知識」と「技能」の違いが重要である。「知識」は英語の特徴や規則の理解を評価するものであり，「技能」は「使用する言語材料の提示がない状況においても，それらを用いて事実や自分の考えなどを話したり書いたりすることができる技能を身に付けているか否かについてを評価する」とされている。しかし，この意味での「技能」と単なる「知識」の評価問題の困難度の差は大きい。これらが同じ観点に含まれることは，どちらに寄ったテストを実施するかによって，評価結果は大きく異なってしまうことを意味する。

第四世代では，「参考資料」「教科書」「評価」が密接に連動することを期待したい。

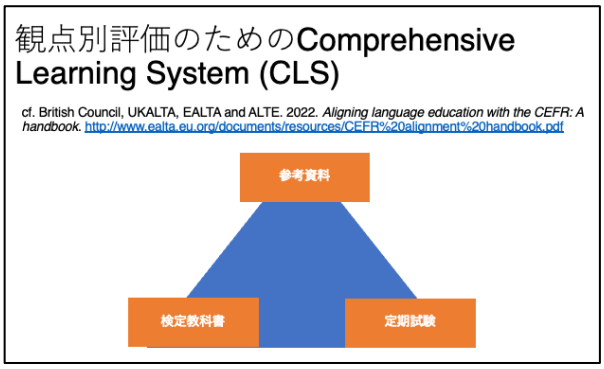


図 3：Comprehensive Learning System

◇研究発表・実践報告を行って◇

その２　発表領域：ICT
題目「ChatGPT を活用した英文エッセイのフィードバックに関する研究」
発表者・報告者：姉﨑達夫先生
（高崎健康福祉大学）

本研究では，大学生が英文エッセイを書く意欲を高めるためのフィードバックはどうあるべきかに焦点を当てて ChatGPT-4o（以下，ChatGPT）の活用方法を探ることにしました。研究方法として，大学生が書く英文エッセイ 7 回分に対する ChatGPT のフィードバックとそれを読んだ大学生の感想からそれぞれキーワードを抽出し，意欲を高めると考えられるキーワードを分析しました。本研究の参加者は 7 名でしたが，パイロットスタディとして位置づけであるため差し支えないと考えました。

ChatGPT が表形式で誤りをまとめるフィードバックと意欲を高める文章のフィードバックの 2 つを出力するようにプロンプトで指示しました。

図 1 は，プロンプトで指定した誤りの箇所，種類，説明，修正案，重要度の 5 つ出力の例を示しています。

Error Segment	Error Type	Reasoning (Japanese)	Correction	Importance
"As a souvenirs, I always pleased."	Grammatical	"souvenir"は単数形が必要で，"pleased"の前に動詞が必要です.	"As a souvenir, I am always pleased."	5
"Besides Denen Plaza, it is sold in various supermarkets."	Cohesion	"it"が何を指すか不明確です.	"Besides Denen Plaza, the drinking yogurt is sold in various supermarkets."	4

図 1：ChatGPT からのフィードバック

図 2 はアドバイス形式のフィードバックの例です。

素晴らしい旅行記ですね！文章からあなたの楽しさが伝わってきます．少しの修正を加えるだけで，さらに読みやすくなりますよ．続けて文章を書くことで，どんどん上達します．自分の体験を共有することで，他の人々も興味を持ってくれるはずです．自信を持って，どんどん書いてくださいね！あなたならもっと上達します．がんばってください！

図 2：ChatGPT からのフィードバック（アドバイス形式）

また，ChatGPT のフィードバックを読んで書いた大学生の感想からキーワード「意欲」を選び，KWIC 機能により文脈を抽出したものを図 3 に示します。

最後の『あなたならきっとできます』という言葉が書く意欲につながると感じた.
『自分の成長を楽しんでください』という言葉が書く意欲につながった.
『あなたの英語力は確実に上達しています』という文から，下手でもいいからもっと文を書いて英語力を上達させていきたいと感じたので，意欲につながったと思う.
『あなたのライティングスキルは確実に向上しています』という文がまた書こうという意欲につながった.
『文章を書くことは練習を重ねることで上達します』という言葉が今後もライティングを続けていこうと思えるため，書く意欲につながった.

『自分の成長を信じて，楽しく書き続けてください』という言葉が書く意欲につながった.
『ミスを恐れずに練習を重ねることで，必ず上達します』という一文が書く意欲につながったと思う.
『あなたなら素晴らしい文章を書けると信じています』のアドバイスが意欲につながったと思う.
『あなたの目標を達成するための努力は必ず報われます』という言葉が書く意欲につながった.
私のプランやライティングスキルに対してのポジティブな言葉がけをしてくれていたので嬉しい気持ちになり書く意欲につながった.

図 3：学生の感想から KWIC で抽出した文の例

これらの ChatGPT のフィードバックと大学生の感想から，ChatGPT が書く意欲を高める言葉を組み合わせながら一人一人の原稿に応じたアドバイスを自然な表現で出力していたことが分かります。

教師は ChatGPT のフィードバックを一人一人に応じてよりきめ細かく修正することで，「英語で表現することが楽しい」や「次もまた書きたい」と思えるような意欲につながるフィードバックを，かなり時間を短縮して作成できるようになると考えます。

今回の発表につきまして，貴重なご意見やご質問，さらに ChatGPT の活用方法を探るための貴重なご示唆をいただきました。心より感謝いたします。研究の方向性を改めて考える機会としたいと思います。どうもありがとうございました。

その３　発表領域：ICT
題目「生成 AI を利用した高校授業の実践」
発表者・報告者：小林良裕先生
（豊島岡女子学園中学高等学校・東京学芸大学大学院生）

今回の研究大会では，自身の勤務校における生成 AI を活用した授業実践について報告しました。教育現場での生成 AI の活用は，教員の業務を AI が代行することや，AI 特有の機能を活かすことが主なテーマとなっています。これまで様々な活用方法が提案されてきましたが，ChatGPT の公開から約 1 年半が経過し，今日までの事例を振り返る時期に来ているのではと考えました。

本発表では，勤務校での実践例を紹介すると共に，生徒が AI による指導をどのように受け止めているか，AI による自由英作文の添削への生徒の意識を質問紙調査の結果から分析しました。

実践内容は以下の 2 点にまとめられます：

1. [生成 AI を用いた，自由英作文の大量・迅速な添削処理と返却] 生徒の自由英作文を Microsoft Forms で回収した上で，ChatGPT を関数として使えるようにした Excel シート上で添削処理し，印刷して返却を行いました。この方法で，提出から当日または翌日の返却を行いました（一連の作業に必要な時間は約 10 分）。高校 3 年生のクラスでは，授業の冒頭で英作文を書かせ，授業時間内か当日中に返却しました。2024 年 4 月から 7 月の間に，高校 1 年生から 3 年生に対して合計 4,217 件の自由英作文を添削しました。
2. [生成 AI を用いた多読教材の作成] 生徒にトピック，キーワード，文章のジャンル（小説や論説文など），語彙レベル，付属する読解問題の形式などを Microsoft Forms 上で入力させ，それに基づいて ChatGPT を関数として使えるようにした Excel シート上で個別の長文読解問題を生成し配布しました。

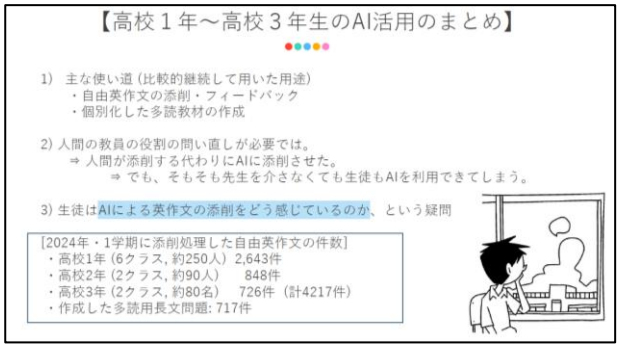
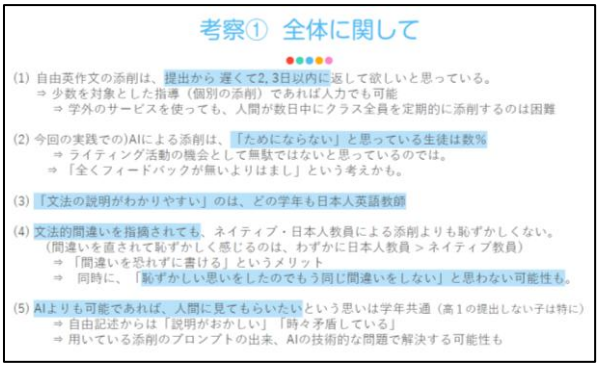


図 1：高校 1 年生から 3 年生の AI 活用

自由英作文の AI 添削に対する生徒の意識を知るために，1 学期の最後に質問紙調査を実施しました。調査は二部構成で，第一部では AI による添削の活用の程度，自由英作文全般について希望する返却日数，現在受けている AI 添削の有益性について選択式で尋ねました。第二部では，添削指導者別（ネイティブ教員，日本人教員，AI）の添削の学習効果，コメントを貰うことへの嬉しさ，文法説明の明瞭さ，コメント量の適切さ，文法ミス指摘時の心理的負担を 5 件法で尋ねました。

調査結果からは，多くの生徒が AI 添削による添削機会の増大・迅速な返却のメリットを感じており，AI 添削に肯定的な評価を示していました。一方で，生徒は人間の教員による添削をより希望しており，可能であればネイティブ教員の添削を最も望んでいました。この背景には，添削コメントを通しての教員との人間的なやりとりへの期待が窺えました。また文法的な説明について，特に日本人教員の説明が最も理解しやすいと評価されていました。AI による添削は，間違いを恐れずに書くことができるというメリットがある一方で，間違いを正す意識が薄れる可能性も示唆されました。



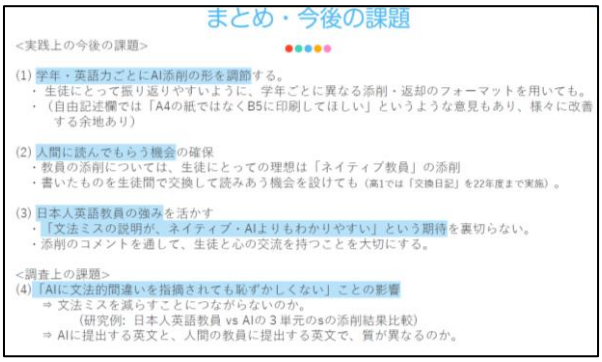


図 2：考察と発表のまとめ

その４　発表領域：指導法・授業実践
題目「オンラインでの質問を授業に反映させる実践の課題と可能性」
発表者・報告者：藤原　剛先生
（山梨県立吉田高等学校）

KATE 山梨研究大会では，発表の機会をいただきありがとうございました。発表の内容を整理し直し，寄稿させていただきます。ご意見などいただけたら幸いです。

標題にあります，オンラインによる質問の授業中の位置づけや各活動のねらいは以下の通りです。

① 授業の主な流れとねらい

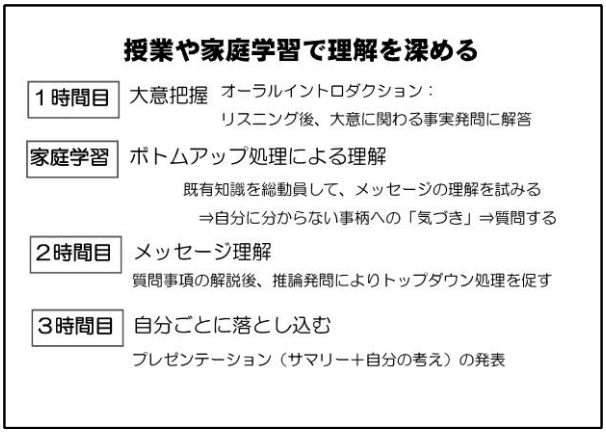


図１：授業の流れとねらい

■　1 時間目　事実発問を元にリスニングを行い，大意を把握する。

家庭学習ボトムアップによる読解を行い，理解を深める。その過程で，分かっていないと気づいた事があれば，オンラインで質問をアップする。

■　2 時間目　質問に対して解説を行い，ボトムアップによる理解を完成する。

推論発問により読解を深め，筆者からのメッセージを理解する。

■　3 時間目　リスニング，音読，シャドーイングに続き，教科書を閉じ，プレゼン（サマリー＋自分の考え）の準備

ペアでプレゼンを行い，互いに英語でコメントし合う。

②オンラインでの質問を取り入れた背景

(1)　和訳の配付や付属の予習ノートが，生徒の気づきを阻害し，表層的理解に留まっているという危惧

途中の学年から担当すると，前任者が和訳を配付し，予習ノートを元に授業をしていたという事がよくあります。これらは授業の進行をスムーズにし，コミュニケーション活動に時間を割けるメリットはあるものの，インプットの理解を人工的なものにし，本当は理解していないのに，理解していると生徒に誤解させます。

(2)　挙手により質問することのデメリット

生徒への意識調査で分かったことですが，授業で挙手して質問することはハードルが高いようです。そのため，何となくの理解でよしとしている生徒が少なからずいます。オンラインでの質問について解説する際には誰からの質問なのかは示しませんので，心理的な負担が減り，生徒は自分の気づきを積極的に共有することができます。

③成果と課題

(1)　熟考の上での深い質問に導くこと

単に和訳による理解が授業の理解であれば，質問は安易なものになりがちです。推論発問で深い理解が求められ，最後にプレゼンがあることで，生徒の理解活動は自ずと message-centered となり，質問もそのゴールに向けられたものになります。

(2)　文法の授業との有機的な結びつき

文法の学習の中心は論理表現の授業で，英語コミュニケーションの授業では別の目標文法事項があり，2 つの授業が有機的に結びつかないことがよくあります。この取り組みでは，気づくべき文法事項を設定しません。生徒が素の状態でインプットと向き合い，分かっていないと気づいたことを中心に授業を進めると，気づきの種は文法学習で未定着だった事柄になります。これを文法授業のシラバスの見直しに活かすことで，2 つの授業を有機的につなげることがで

きます。それによって更に深い定着につながります。

(3)　生徒の不満

それでも，手軽さゆえの安易な質問もあります。当初，あらゆる質問を授業で解説したため，授業が間延びし，十分に理解できている生徒からは「授業のテンポが遅い」などの不満が寄せられました。

また，質問の意図が正確に伝わっていなかったという不満も寄せられました。そして，気づきへの対応として最も満足度が高かったのは個別に質問に答え，解説することでした。今後は質問の内容や性質により，個別に質問に答えることと併用していく必要があると感じました。

最後までお読みいただき，ありがとうございました。また研究会等で多くの皆さまと交流できるのを楽しみにしております。

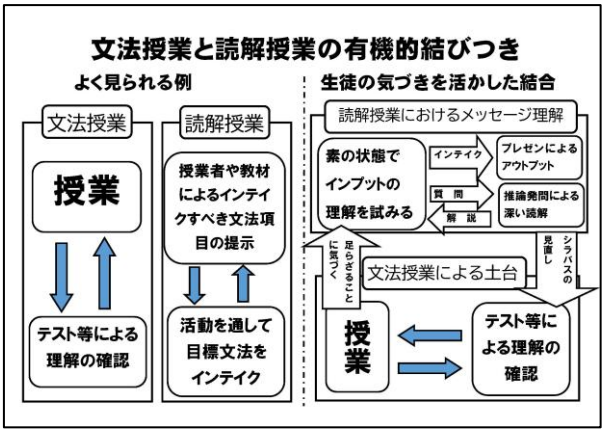


図 2：授業間の有機的結びつき

◇授業実践報告（小学校）を行って◇

題目「都留文科大学附属小学校の専科教員による Jolly Phonics を使った英語指導」
指導助言：上原明子先生（都留文科大学）
発表者・報告者：相川美登利先生
（都留文科大学附属小学校）

英語特例校であるわが校は，3 年生からフォニックスの指導を取り入れています。授業の始め 20 分程度の帯時間を使い，『ジョリーフォニックス』（ジョリーラーニング社，2017a，2017b）を用いてシンセティック・フォニックスの学習をしています。学習を始めて 5 ヶ月になる 5 年生の授業実践を紹介するとともに，“p” の文字のフォニックス授業の実演を行いました。

42音と基本の綴り
6音ずつ 7 グループを順に学習　単語の中に多く出てくる順（読める単語が増えやすい順）

1	s	a	t	i	p	n
2	c k ck	e	h	r	m	d
3	g	o	u	l	f	b
4	ai	j	oa	ie	ee	or
5	z	w	ng	v	oo	oo
6	y	x	ch	sh	th	th
7	qu	ou	oi	ue	er	ar

図 1：42 音と基本の綴り（ジョリーラーニング社，2017a）

基本の 42 音を 7 グループに分け，各レッスンごとに 8 つの活動を行います。発表では第 5 グループ最初の文字 “z” を扱っています。

1. 音の復習　今まで習った 25 文字（a ~ ee, or）の文字カードの音をアクションをつけて発音し，復習します。これは記憶の定着につながります。
2. お話　ビッグブックの絵本を使って，物語を話し，/z/ の音を強調しながら，文字とアクションを導入します。これは音の想起につながります。
3. アクション　花の周りを蜂が “z z z” と飛んでいる様子を見せ，お話の中で導入し，/z/

の音をアクションをしながら練習します。これは記憶の定着につながります。

4. 文字の確認　“z” の文字の書かれていく様子を板書や空書きで示し，その後，ワークで書く練習を行います。これは文字の形の認識につながります。
5. 音の聞き取り　イラストを見ながら，発音される単語の中に /z/ の音があるかを聞き分け，単語のどこにその音があるかを考えます。段階的に，指の動きや音を指で示したり区切ったりするなど補助を入れて，理解を促します。これは音韻認識を高める練習です。
6. ブレンディング　つづりを見ながら，一つ一つの音を組み合わせて単語の発音を練習します。音ボタン・手・腕などを使い，音のつながっていく様子を示します。これは「音と文字の操作」を身に付ける練習で，reading の基本になります。
7. ディクテーション　発音された単語を文字で書く練習をします。段階的に，指で音を分割して示す，アクションを使う，文字の絵を見せるなどの補助を行います。これは「音から文字への操作」の力を身に付ける練習で，writing の基本になります。
8. 歌　歌を聞き，/z/ の音を確認します。次に，/z/ の音の部分だけアクションをしながら歌います。これは音を聞く力を育てます。

このように多感覚を用いて，単語の中に多く出てくる順に文字を学んでいきます。文字，音，アクションを結びつけて学習するので，楽しく，興味深く，記憶に残るように「音と文字の関係」を学ぶことができます。自分の力で読み書きできる力を楽しく身に付けることができると信じて指導しています。「聞ける・話せる」の他に「読める・書ける」喜びと自信を養い，中学校の英語に円滑に接続できることを期待しています。

図 2：授業の様子

引用文献

ジョリーラーニング社（編），山下佳世子（監訳）．(2017)．『はじめてのジョリーフォニックス-ティーチャーズブック』．東京書籍．

ジョリーラーニング社（編），山下佳世子（監訳）．(2017)．『はじめてのジョリーフォニックス-スチューデントブック』．東京書籍．

◇授業実践報告（中学校）を行って◇

題目「即興的なやり取りを中心とした授業」
指導助言：丹沢伸也先生
（元山梨県市川三郷町立三珠中学校校長）
発表者・報告者：小林雄飛先生
（山梨県市川三郷町立六郷中学校）

即興的なやり取りを中心とした授業というテーマで授業実践報告をさせていただきました。教科書を用いて即興的にやり取りを行うことを通して，「身近な話題のやりとり」を，単元 (Unit) の指導過程で蓄積し，Unit の最終目標 (goal) に到達することを目標に取り組みました。

日常の実践としては，図1にあるような13のポイントを意識しながら行っています。本提案授業では Unit の 1 時間目の授業となる「扉」のページを取り扱いました。この 1 時間の中に ①場面：warm up, small talk　目的：goal に向け，必要な情報を得る　②場面： warm up, small talk 後　目的：goal に向け，得た情報を

書き留める　③場面：単元の内容導入時　目的：単元のスキーマの活性化　④場面：単元の内容導入時　目的：単元の内容の personalize 化　の 4 つのポイントを取り入れました。

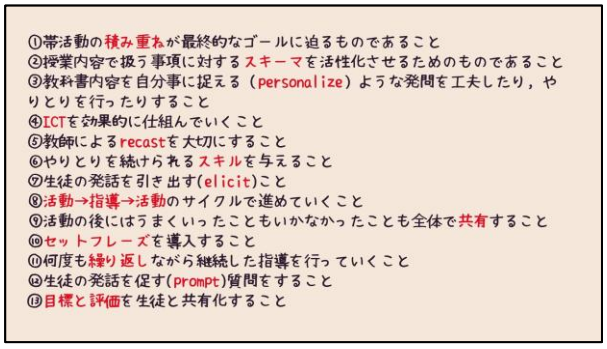


図 1：実践で意識しているポイント

図 2：授業実践報告（中学校）題目

授業を 1 時間分視聴しながら，Canva Live でインタラクティブセッションを開いて発表を行いました。1 時間を通す中で，挨拶の場面で，small talk の場面で，small writing の場面で，listening activity の場面でなど，ご参観いただいた方々からは，視聴しながらリアルタイムでご質問やアドバイスをいただくことができました。質問やご意見をすぐにその場で多くの方々からいただけたことで，私自身もあらためて自分の授業を様々な視点で見ることができて大変有益な時間となりました。いただいたコメントには，生徒の様子や教室の様子などに関わるご質問をいただいたり，small talk と small writing についてご質問を多くいただきました。Accuracy と Fluency をどんな活動にどの程度求めていくべきなのかをあらためて確認できました。コメントの多くには，主として話すことに関わる言語活動の場面では，Accuracy よりも Fluency やコミュニケーションに向かう姿勢を求め，主として書くことに関わる言語活動の場面では，Accuracy を求めていくことは理にかなっているのではないかというものでした。また，教科書を元に授業を進めることを継続することで流ちょうさと正確さの両方につながるのではないかというご示唆もいただきました。

今回実践を報告させていただくことが自分自身の授業を振り返るきっかけとなり，多くの方からの貴重なコメントを多数いただくことができ，本当に貴重な機会となりました。すべての関係の皆さまにこの場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。

◇授業実践報告（高等学校）を行って◇

題目「教科書を使って生徒のやり取りを促す指導」
指導助言：三浦幸子先生（都留文科大学）
発表者・報告者：田中知聡先生
（山梨県立甲府昭和高等学校）

山梨県立甲府昭和高等学校に勤務して 4 年目になります。本年度は 1 学年を担当しています。英語授業で心がけていることは，生徒が英語を使って新しい情報や考え方を学び，互いに情報や考えを伝え合いながら思考を深め，発信していく力をつけていくことです。そのために欠かせないのが教科書を中心とした教材研究，授業中の発問とやり取り，授業と評価の一体化です。

関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨大会では，本校の 1 年生を対象に行った授業のビデオを視聴していただき，単元目標と授業デザイン，リーディングとライティング指導におけるやり取り，生徒のライティング作品と中間指導の在り方等について発表しました。三浦幸子先生には当日の授業にもお越しいただき，教師と生徒とのやり取りの在り方や生徒の発言の拾い方等についてご助言をいただきました。

本稿では，学会当日に使用したスライドの一部を紹介しながら発表内容を報告します。

１．単元目標と授業デザイン

授業実践報告でご覧いただいた授業は英語コミュニケーションⅠで，使用した教科書は *Heartening English Communication I*（桐原書店）でした。単元は Lesson 3 We Can Make a Difference で，世界の気候変動がテーマであり，「世界環境デー」に 4 人の人物がそれぞれの国や地域の問題点と意見を投稿しています。

図１：単元の最終目標

同僚と共に教材研究をし，生徒が気候変動についての投稿文を読んで問題点や意見を理解し，自分の意見を投稿することができることを最終目標に決めました。4 つのパートを読み進めながら，読んだことをもとに意見を書く練習ができるよう，それぞれのパートの投稿文を読みその人をサポートする立場に立って投稿文の内容を引用または要約し，サポートする意見を投稿することにしました。Padlet 上に投稿サイトを作成し，生徒がリプライを書いたり投稿したりできるようにしました。

２．リーディングにおけるやり取り

授業では教師が発問を活用して生徒が考えながら読み進めることができるよう工夫しました。

Get Ready や，First Reading では，全体を捉えるための問い（What is the topic of this lesson? / What is the writer's name? / Where is the writer from? / What is written in this paragraph?）等を使い，生徒に全体像を把握し焦点を当てる発問をしました。また，生徒と結びつける問い（Have you ever heard about Environment Day? / Do you think it's difficult to post your opinions?）等を使い，学習内容と生徒を結びつけました。

Second Reading では，情報を整理しながら読み，概要・要点を捉えて理解したこと視覚化させる問い（Can you draw the graph?）や，生徒が黒板に書いたグラフを使って生徒と結びつける問い（If the sea level rises like this, what will happen? How about people near the harbor or by the sea?）を使いました。「住めなくなる」といった生徒のつぶやきを拾い，「住めなくなる in English? They...?」と英語での発言を促すと，生徒からは“They cannot live there anymore.”と返ってきました。また，筆者の主張を捉える問い（What does Aaron point out?）や事実と意見を分けて捉える問い（Is this fact or opinion?）を使い，投稿文には意見だけではなく事実も書かれていることに着目させました。これは読む活動を書く活動につなげることが狙いです。

Third Reading では，筆者の意見（Our city can do more.）をもとに，生徒と結びつける問い（Do you think we can do more? / Do you think people in Hong Kong can do more?）等につなげました。また，教科書の本文中にある内容をもとに問い（Do you see any signs of climate change in Japan?），生徒同士でやり取りをする時間を取りました。生徒がやり取りをしている間，生徒の発話を聞いてまわり，必要に応じて反応の仕方や追加の問い，主語や動詞の選び方，助動詞の使い方等の中間指導を行いました。最後に，自分の意見を構築するための問い（What do you think Japan should do?）を使い，生徒同士でやり取りをする時間をさらに取り，考えたことを英語で伝え合う練習を行いました。

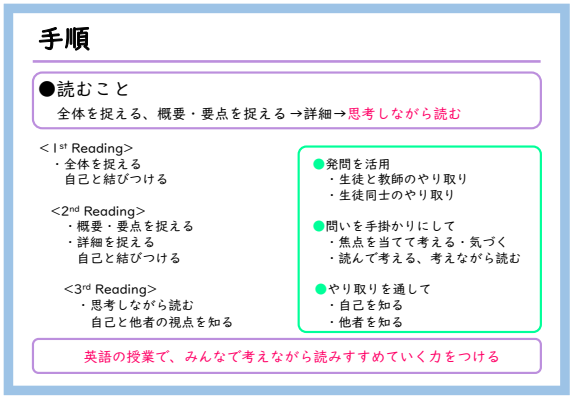


図 2：リーディングにおけるやり取りの手順

3．ライティングにおけるやり取り

学会でビデオ視聴をしていただいた授業の次の授業では，Aaron の投稿を読んで彼を支持する投稿文を生徒が書いて Padlet に投稿する活動を行いました。その際にも，生徒同士でやり取りをしてブレーンストーミングを行いました。やり取りを通して，生徒は自分自身の考えに気づいたり，考えを広げたり，他の生徒の発話を聞いて学んだりすることができます。

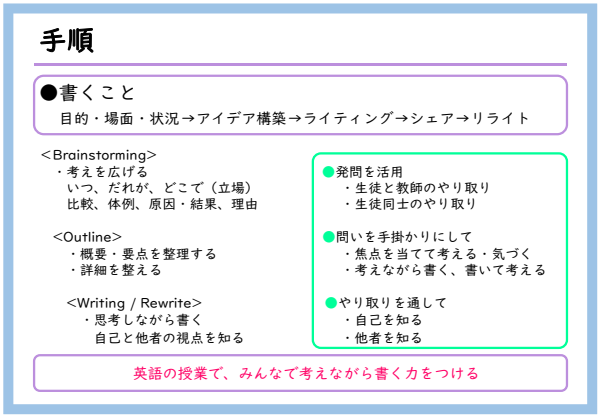


図 3：ライティングにおけるやり取りの手順

4．生徒のライティングと中間指導

Part 2 の授業でも，Part1 と同様に，投稿者をサポートするために投稿内容を引用しながら自分の意見を書いて投稿しました。次のスライドは，Glory をサポートするために生徒が Padlet に投稿したものです。

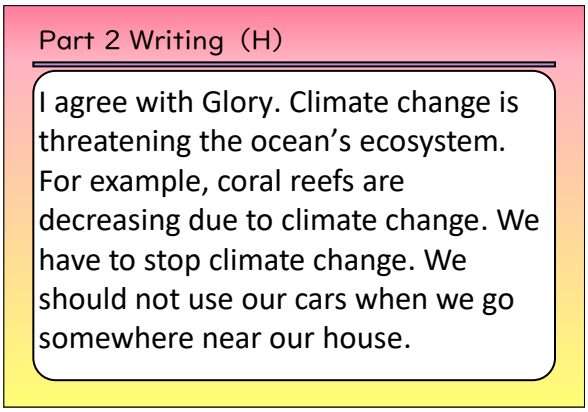


図 4：投稿の例

ライティングにおいても生徒の投稿や生徒の様子を確認しながら，生徒が必要性を感じるタイミングで中間指導をしました。

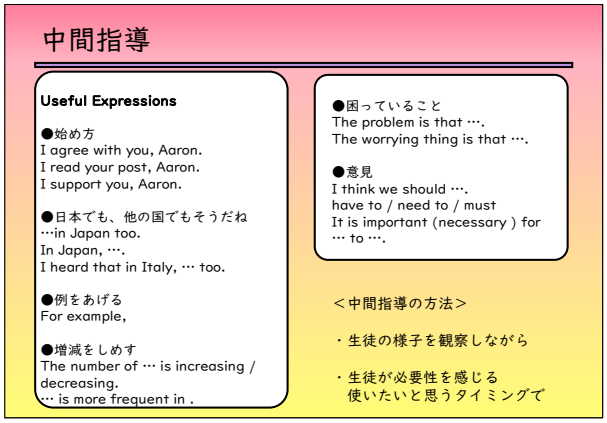


図 5：ライティングにおける中間指導

今後も生徒の成長を楽しみにして授業実践に取り組んでいきたいと思います。

◇学会企画を行って◇

題目「対話指向英語スピーキング能力自動判定システムの開発」 発表者・報告者：鈴木駿吾先生 （早稲田大学）

この度，KATE 学会にて Tutorial English AI プロジェクトの紹介をさせていただく貴重な機会をいただきました。本プロジェクトは，独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）委託事業「人と共に成長するオンライン語学学習支援 AI システムの開発」（約 4 億 6,000 万円 / 5 年間）として，英語教育の専門家と AI が連携して，学習者と教育者の双方に対して納得感のある英会話学習を実現することを目指しています（https://www.teai-waseda.jp/）。

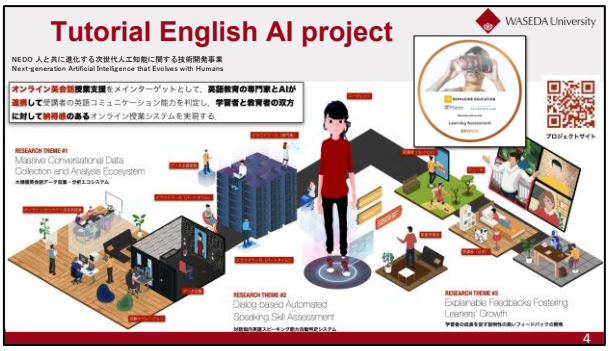


図 1：Tutorial English AI Project

講演ではまず，日本の学習指導要領で強調されている「やり取りの力」と，第二言語習得（SLA）や言語テスト研究における「Interactional Competence（相互行為能力）」の関係性について説明しました。相互行為能力は，会話を共同で構築し，状況に応じて適切に対応する力として定義されており，これは学習指導要領で求められるスピーキング能力と密接に関連しています。

次に，こうした「やり取りの力」を自動判定するツールとして，対話システム「InteLLA（Intelligent Language Learning Assistant）」を使用した研究を 2 つ紹介しました。1 つ目の研究[1]では，日本人英語学習者が InteLLA と実施したロールプレイ会話がどれほど自然であるかを会話分析に基づいて評価しました。2 つ目の研究[2]では，学習者の会話へのエンゲージメントを，心理尺度を用いて英語教員と InteLLA 間で比較を行いました。英語能力を発揮しようとする観点で両者に差はないものの，その他の側面においては英語教員の方が有意に高いことが示されました。

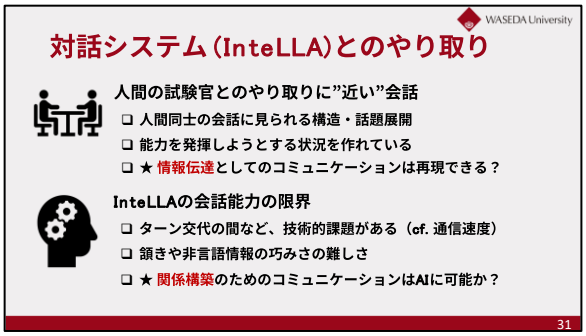


図 2：InteLLA とのやり取りの特徴

また，InteLLA の学びへの応用として，千葉県立成田国際高校で行われた実証実験の結果を共有しました。この実験では，生徒が InteLLA を使用して英語のやり取りを合計 8 回練習し，結果として全体の 20%の学生が CEFR における A2 から B1 へと移行しました。さらに，説明可能な AI 技術（Explainable AI）を用いた最新の診断評価についても紹介し[3]，学習者が自らのスキルの強みと弱みを理解し，効果的に学習を進めるためのフィードバックを提供するシステムの紹介をしました。

まとめとして，英語教育における会話型 AI の可能性と限界について議論しました。AI は，特に大規模なスピーキング練習や評価の実現に大きな可能性を持っていますが，それでも教師や教室内活動の役割は依然として重要です。中学生などの初学者には，教員による指導・支援が不可欠であることは言うまでもなく，ピアや教員など，人同士のやり取りの機会があってこそ，AI との会話練習に意味が生まれることを忘れてはいけません。AI は補助ツールとして語彙や文法などの言語学習を促進しますが，効

果的なやり取りのために，その言語をどのように使うべきかといった能力を育成するためには，教室環境の重要性が一層高まることを強調しました。

[1] Eguchi, M., Takizawa, K., Saeki, M., Kurata, F., Suzuki, S., Matsuyama, Y., & Sawaki, Y. (forthcoming). Interactional performances and co-construction during AI-delivered roleplay for assessing interactional competence. *TESOL Quarterly*.

[2] Kurata, F., Saeki, M., Eguchi, M., Suzuki, S., Takatsu, H., & Matsuyama, Y. (2024). Development and validation of engagement and rapport scales for evaluating user experience in multimodal dialogue systems. *Proceedings of International Workshop on Spoken Dialogue Systems (IWSDS)*, 1–14.

[3] Suzuki, S., Takatsu, H., Matsuura, R., Koyama, M., Saeki, M., & Matsuyama, Y. (forthcoming). Feedforwarding diagnostic language assessment: AI-driven weakness identification and contextualised feedback for L2 speaking. *Language Testing*.

関東甲信越英語教育学会　2024年度第48回山梨研究大会プログラム

会長　西垣知佳子（千葉大学）　　大会実行委員長　浅見道明（都留文科大学）

2024年８月17日（土）		
11:30–12:30	理事会・受付	企業展示
12:30–12:50	開会行事	
13:00–15:15	１ 自由研究発表・実践報告（①～④）	
15:30–17:10	２ 講演『「知識」「技能」「思考・判断・表現」の評価』 根岸雅史（東京外国語大学 世界言語社会教育センター特任教授）	
17:30–19:00	３ 懇親会	

2024年８月18日（日）			
9:30–10:00	受付		企業展示
10:00–11:05	４ 自由研究発表・実践報告（⑤～⑥）		
11:10–11:40	５ 総会		
11:40–12:30	昼食		
12:30–13:35	６ 自由研究発表・実践報告（⑦～⑧）		
13:50–15:00	7-A 授業実践報告（小学校） 「都留文科大学附属小学校の専科教員による Jolly Phonics を使った英語指導」 相川美登利 （都留文科大学附属小学校専科教員） 上原明子 （都留文科大学教授）	7-B 授業実践報告（中学校） 「即興的なやり取りを中心とした授業」 小林雄飛 （山梨県市川三郷町立六郷中学校教諭） 丹沢伸也 （元山梨県市川三郷町立三珠中学校校長）	
15:10–16:20	8-A 授業実践報告（高等学校） 「教科書を使って生徒のやり取りを促す指導」 田中知聡 （山梨県立甲府昭和高等学校教諭） 三浦幸子 （都留文科大学教授）	8-B 学会企画 「対話指向英語スピーキング能力自動判定システムの開発」 鈴木駿吾 （早稲田大学グリーン・コンピューティング・システム研究機構次席研究員）	
16:30–16:40	閉会行事		

◆協賛・広告掲載企業一覧

展示企業	一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会 開隆堂出版株式会社 株式会社アルクエデュケーション 株式会社 EdulinX 株式会社桐原書店 株式会社 三省堂書店 株式会社 成美堂 株式会社大修館書店 株式会社ダンケゼア ピアソン・ジャパン株式会社 光村図書出版株式会社
広告掲載企業	株式会社新興出版社啓林館 教育開発出版株式会社 東京書籍株式会社 光村図書出版株式会社
ちらし配布企業	ETS Japan 合同会社 ピアソン・ジャパン株式会社

（掲載は50音順）

研究大会開催にあたりましては，上記のように，協賛を賜りました。
ここに厚く御礼申し上げます。

◇全国英語教育学会　第 49 回福岡研究大会　課題研究フォーラム報告◇

日時：2024 年 8 月 24 日（土）
場所：福岡工業大学 A 棟 A11 講義室
題目：エンゲージメントを引き出す英語授業
　　－小中高での実践から－
コーディネーター・提案者：廣森友人先生
　　（明治大学）
提案者：俣野知里先生
　　（京都府京都市立二条城北小学校）
　　胡子美由紀先生
　　（広島県広島市立美鈴が丘中学校）
　　泉澤　誠先生
　　（武蔵野中学高等学校）

1. はじめに（廣森友人）

学校における生徒のモチベーションの問題は，長い間にわたって課題となっている。このような状況の中で，近年，「エンゲージメント」(engagement) という概念が注目されている。エンゲージメントは，モチベーションと行動をつなぐ新しい動機づけ概念である。エンゲージメントは，単に生徒のモチベーションを引き出す（高める）だけでなく，そのモチベーションが実際の行動に結びつくプロセスを理解しようとする試みであり，実践的なアプローチを提供する。

本フォーラムでは，生徒を教室内外における英語学習にどのようにエンゲージさせるか，そのために何ができるかに関して，小学校（俣野知里先生），中学校（胡子美由紀先生），高等学校（泉澤誠先生）での実践例を紹介する。

2. 各提案の概要

(1) 「エンゲージメントの向上につながる授業の検討－小学校外国語における実践をもとに－」（俣野知里）

児童のエンゲージメント（以下，EG）向上を目指した第 6 学年の実践を報告した。単元導入では，指導者の出身地を話題に児童とやり取りをし，EG の喚起を図った。その後，まちにあるものやそこでできることを伝え合う活動等により EG の維持を試み，最後に，互いのことをよりよく知るために ALT と出身地について伝え合う活動を採り入れた。結果，目標達成に向け，友達と協力し粘り強く学習に取り組む児童の姿が見て取れた。終末の自己評価では，約 9 割の児童が「先生や友達とまちにあるものやそこでできることについて伝え合うことができる」を選択し，振り返りには，友達の良かった点や自分のうまくいった／うまくいかなかった点を見つけ，繰り返し改善した等の記述も見られた。EG の枠組みをもとにすることで，より多様な側面から授業をデザインしたり，考察したりすることが可能になった。学習への深い関与を促す授業の在り方について，引き続き検討を重ねたい。

(2) 「学習者のエンゲージメントを引き出す授業づくり―中学校の実践から―」（胡子美由紀）

VUCA (Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity) の時代の今，学習者には自らのビジョンを持ち，課題解決に向けて行動する力が必要だ。しかし，対人関係の不安や言語バリア，依存体質などの要因から，支援が必要な生徒が多いのが現状だ。本発表では，学習者エンゲージメント (EG) の喚起・維持・強化を目指した中学 2 年生の実践を取り上げた。EG 向上のために重視したのは，「関係性の構築」「言語活動」「授業デザイン」の 3 つだ。土台として，自由記述アンケートを活用した実態把握と共感的な関わりを重視した。クラスモットー「Hole in One」や「10 ルールズ」の浸透で，心理的安全性と規範性を確保し，互恵学習により集団凝集性が向上した。また，ALT へのメッセージ作成などの言語活動が「必要感」と「自分ごと」を引き出し，EG 喚起・維持に貢献した。Input for Output において，活動を Baby Step で配置することで認知的負荷を軽減し，振り返りを通じてメタ認知を強化した。その結果，自己有用感が高まり，感情的・社会的 EG に大きな変容

が見られた。

(3) 「高校生の留学を通したエンゲージメントの変化とその要因―質的分析の観点から―」（泉澤誠）

フィリピンへの 2 週間の語学研修に参加した高校 3 年生 1 名を対象に，留学前・中・後の英語学習への取り組みに関するアンケートおよび質的インタビューを実施した。その結果，留学を通してエンゲージメント (EG) が促進された要因は，(1) 有能性，関係性，自律性の欲求を充足させる，(2) 授業中の自身の行動を客観視しコントロールする，(3) 学習内容と既習事項を結びつける，(4) 適切な教員のサポートを受けることであると示唆された。周囲と協調しながら学習に取り組むこと，留学中のつまずきから気付きを得ること，「やったことがある」という経験が「できる」という自信につながること，慣れない環境において教員が学習者をサポートする中で信頼関係を築くこと。このような留学中の経験は，実践の場面において我々教員が日々大事にしていることであるのと同時に，EG やその周辺の学習者要因の理論の観点からも極めて重要であると説明できる。今後も EG の議論を通して，理論と実践が統合され学習者の助けになることを願う。

3. 参加者の声

近年，応用言語学の分野において学習者のエンゲージメントが注目されており，私も多くの文献を通じて基本的な理論や概念について理解を深めてきた。しかしながら，「エンゲージメントの知見をいかに具体的に教育現場へ導入できるか」という点については，常に課題意識を持っていたのである。

そんな中，今回の課題研究フォーラムに参加し，廣森先生によるエンゲージメント理論の説明とともに，3 名の現場の教師による実践報告を拝聴した。このフォーラムは私にとって非常に有意義なものであり，長らく抱いていた疑問が氷解されると同時に，多角的・多面的な視点で自分事として考えることができた。

また，発表を聞いて嬉しくなったことがある。それは，エンゲージメントが伝染する瞬間を垣間見ることができたことだ。それぞれの発表者がエンゲージしながら発表をされた結果，フロアにいた多くの参加者が自身の目を輝かせながらワクワクしており（感情的エンゲージメント），発表内容を熟考し（認知的エンゲージメント），積極的に質問し（行動的エンゲージメント），そして，最後には行列を作って交流をしている方もいたのである（社会的エンゲージメント）。この場は，理論と実践を結びつける非常に貴重な機会であり，研究者と教育者の双方にとって示唆に富むものであった。

今後は，学習者をエンゲージさせること，そして，研究者や教育者としての自分自身もエンゲージさせることの重要性に気づかせることができるように，研究と教育実践に励んでいきたい。勇気をくださってありがとうございました。

◇研究推進委員会報告◇

第 24 回 英語教育「なんでだろう？」座談会

日時：2024 年 6 月 8 日（土）15:00～17:00
場所：神田外語学院 7 号館 4 階教室
テーマ：『実践編！生成 AI（ChatGPT 等）を活用した英語教育：授業と業務の効率化を目指して』
講師：研究推進委員会：
　　青田庄真先生（茨城大学）
　　臼倉美里先生（東京学芸大学）
報告者：伊藤泰子先生（神田外語大学）

今回の座談会は，3 月に開催された座談会の第 2 弾として，実践面を中心に対面参加者 7 名，オンライン参加者 22 名の合計 29 名でのハイブリッド形式で開催された。冒頭の「AI を宿題に使うのはズル？」という講師からの問いかけに対して，参加者の 9 割が「ズルくない」と答えたことから，生成 AI の「適切な使い方」に対する興味が高いことがうかがえた。「生成 AI とは？」「生成 AI の得意・不得意な点」「使用

の際の注意事項」などの第 1 弾の復習ののち，今回の主題である英語教育関連で生成 AI にできることについて，「授業」（教師が使う場合と生徒が使う場合）と「業務」の 2 つに分けて概要が説明された。また，具体的な使い方のコツとして，教育目的で使うための設定やプロンプトを書く際の注意点にもふれられた。

後半は，「教材・テストづくり」「英作文の添削」「業務の効率化」と，第 1 弾で反響の大きかった「画像生成AI」の合計 4 つのテーマのブレイクアウトルームを設けて，参加者には自分の興味のある部屋に入っていただいた。また，対面参加者は会場で研究推進委員とともに興味のあるものを試された。1 部屋につき 1 人ずつ研究推進委員が入ってファシリテーターを務め，ブレイクアウトルーム終了後は各部屋の報告を行った。これを再度繰り返すことで，参加者には興味のある 2 つの部屋に入って少しでも多くのことが試せる機会を提供した。参加者が試したこととしては「リーディングパッセージの単語リスト作成」「生徒の英作文から共通エラーの抽出」「資格試験対策としてライティング練習問題の作成」「評価のためのルーブリック作成」「学級通信の原稿作成」等が挙げられ，実際に試してみた感想として「エクセルやワードのファイルで出力されるのは助かる」「20 名の生徒の英作文から特定の文法項目の間違いを出してもらい，さらにエラーを起こしやすい生徒も見極めることができるだろう」「出力されたものはそのまま使えないが，たたき台として扱い，自身の状況に合わせて修正していくことができれば効率的な活用になるであろう」といった声が聞かれた。対面参加者のグループでは，生成 AI の使い方を生徒に教えることを目的として，「生徒にプロンプトを作らせるための練習問題」を生成 AI に作らせてみたところ，ChatGPT 無料版の上位モデル 4o では活用できそうなものが出てきたとのことだった。第 1 弾の座談会以降まだ 3 ヶ月も経たないが，この間にも ChatGPT がアップデートされるなど，生成 AI の進化はすさまじい。より良い教育をデザインするために生成 AI を「適切に」活用する方法を身に付けることが教師に求められると実感した 2 時間であった。

◇研修企画委員会報告◇

７月　月例研究会

日時：2024 年 7 月 13 日（土）16:00～18:00
場所：学習院高等科マルチメディア教室

テーマ：エデュテインメントが変える日本の英語教育～英語を諦めていたすべての日本人が言葉の壁・心の壁を打ち破る！～
発表者・報告者：山中裕斗氏（ミントフラッグ株式会社 代表取締役 副社長 & COO）

1. 英会話力は AI 時代の最重要スキル

AI 時代の人間の最重要スキルは何か？それは AI にはできない，コミュニケーションスキルになるはずです。加えて環境も大きく変わろうとしています。訪日外国人の急増により日本の地方小都市にも外国人が来訪するようになり，これまで英語が不要だった方にも英語が必要になり，また円安によりリモートで海外企業と働くことで高い収入が得られるようになりました。そんな新しい時代の日本人には，必ずしも文法が完璧でなくとも，世界中の人たちと心の通った意思疎通ができる，そんな英会話力が一層求められるはずです。日本人で英語を話せる人は人口の 9%と言われていますが，このままで良いわけがありません。

2. ミントフラッグの挑戦

今回のお話は，ほとんどの日本人を英語を話せるようにしようという壮大なチャレンジです。エンターテインメント，AI，コーチングの力を使って「今英語に意欲がない人たちでも，日本にいながらにして意思疎通のための英語を話せるようになること」を私たちは目指します。

そのためには英語の 3 つの問題を解決する必

要があります。①量の問題（学校や英会話教室の時間だけでは足りない），②質の問題（試験向けの英語ではなくコミュニケーションの英語を），③マインド（文法，発音が完璧じゃないとダメ！からの脱却）です。

この問題をデジタルとヒューマンで役割分担をして解決するのが弊社の「マグナメソッド」です。アニメやゲームを使ったエデュテインメント型の AI 英語アプリ「マグナとふしぎの少女」と人間の専属コーチによるコーチングを組み合わせたサービスです。当日は，東京学芸大学・高山芳樹教授に監修をいただいた，本アプリのインプット機能としての単語・フレーズ学習やアウトプットとしての AI 英会話を題材に先生方とディスカッションをしました。

図 1：「マグナとふしぎの少女」の画面例 1

3. アプリの力と人間の力と

アニメやゲームによって「今」英語に意欲がない人たちにも英語を始めてもらえるようになります。ただアニメ等は英語学習を楽しめるようになるための助走期間の位置付けです。英語を話せるようになるには，毎日学習を続ける努力や成長を楽しめるようにならなくてはいけません。このモチベーションのステップアップをサポートするのが人間のコーチです。

そしてコーチのサポートがついた生徒は，コーチなしの生徒に比べアプリでの学習量が 30 倍となることもわかってきました。結果，高校生レベルの英単語を小学生でも習得する生徒が続々と出てきています。

図 2：生徒の段階

語彙力がついてきたら次はアウトプットです。外国人との英会話レッスンと異なり，AI 英会話は無制限に話をすることができます。しかし一般的な AI 英会話には重大な問題があります。「AI と話す話題がない」のです。そのため私たちは AI キャラに日本全国を旅をさせ，日本各地について学習者と AI キャラで話をする AI 英会話ゲームとすることでこの課題を解決しました。

図 3：「マグナとふしぎの少女」の画面例 2

本物の外国人との会話とは違い，話がつかえても恥ずかしくありません。何度でも聞き直すこともできます。日本人にとって限られたときにしかできない特別なものだった英会話が，AI によっていつでも気軽にできるものになったのです。しかもゲーム感覚で。

図 4：「マグナとふしぎの少女」の画面例 3

共同研究パートナーである東京学芸大学・高山教授の一般英語の授業では，AI キャラとの英会話を帯活動として実施している。

図 5：東京学芸大学での実践

月例会の最後には，このアプリは一部機能制限をしたエデュケーショナルコモンズとして教育機関の方は無償で利用いただけることをご紹介して終了しました。無償利用のご案内はこちらをご覧ください
(https://mintflag.com/education)。

「AI 英会話は文法に間違いがあっても通じるのか？，発音判定はどの程度厳しいのか？」「AI 英会話ゲームのクリア条件は？」など，終始，先生方からの質問の絶えない 2 時間となりました。エデュテインメントと AI，そして人間のコーチングで，日本人の英語が話せない問題の解決を目指してまいります。参加者の皆さま，大変ありがとうございました。

12 月　月例研究会

日時：2024 年 12 月 21 日 (土) 16:00～18:00
場所：筑波大学附属高等学校

テーマ：「公立中学校における生成 AI を活用した英語意見文指導の充実」
発表者・報告者：彦田泰輔先生
（愛知県尾張旭市立西中学校）

公立中学校における生成 AI (ChatGPT) の活用を通じた英語意見文指導の具体的な取り組みと，その効果や課題についてお話させていただき，実際に参加者に，生徒が使った自作の GPTs（アプリ）を体験してもらいました。

はじめに

自然言語処理 AI である，ChatGPT の特徴は，「対話により進められる」点にあります。本実践は，教師が作成した意見文の修正・改善を行ってくれる GPTs を，生徒が一人一台端末を活用し，個別に学習を進めていきました。特徴を以下の 3 つにまとめました。

■　教師の役割の変化

生成 AI を活用することで，教師自身の個々のスキルに依存せず，より全体の学習支援や創造的な指導に専念できるようになる。

■　学習の個別最適化

AI が生徒一人ひとりに合わせた学習サポートを行い，全体に対するフォローが容易になる。

■　効率化と均一化

生成 AI によって，授業の質やフィードバックの均一化が可能になり，学習支援の効率が向上する。

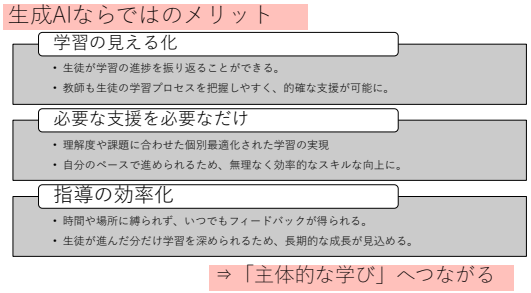


図 1：生成 AI の特徴

指導の内容

生成 AI は以下の点で生徒の学習をサポートしました。

■　目標に特化したサポート

英語の意見文作成において，教科書やカリキュラムに基づいた適切な支援を提供した。文法，表現力，説得力を段階的に向上させる指導を実施した。

■　段階的なフィードバック

文法やスペルの修正から文章構成や説得力の向上まで，段階的なアドバイスを行った。また，生徒が自分で修正しながら成長できるプロセスを重視した。

■　自己反省を促す質問

修正の必要性や意図を問う質問を通じて，生徒が自分の文章を深く考える機会を提供した。

■　構成の明確化

「導入」「本文」「結論」という基本構成を学び，論理的な文章作成を支援。必要に応じて段落の順序を整理し，説得力を強化した。

■　選択肢の提示

修正案を複数提示し，生徒が自分の意図に合ったものを選べる環境を提供した。

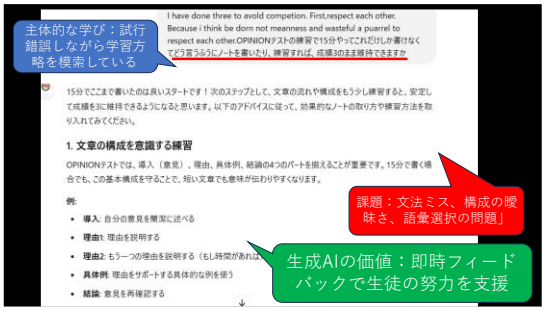


図 2：生成 AI を活用した指導例

成果

■　生徒が書く力を段階的に向上させ，自信を持って意見文を作成できるようになった。

■　生徒の学習履歴が可視化され，教師が的確に支援できるようになった。

■　生徒が自分のペースで学習を進められるようになり，個別最適化された学びが実現した。

課題

■　一部の生徒が AI を翻訳機のように使い，単に答えを得る手段とみなしてしまうケースもあった。

■　AI リテラシー教育が不足しており，生徒が生成 AI を適切に活用するスキルを十分に身につけていないことが課題として挙がった。

結論

生成 AI は，生徒の作文力向上や主体的に学習に取り組む態度を育成する点において大きな可能性を秘めています。一方で，AI リテラシー教育の強化や適切な利用方法の指導といった課題も残されています。生成 AI の教育活用を成功させる鍵は，教師と生徒が協力して「賢い活用方法」を模索し続けることにありそうです。

参考文献

田中博之 (2024). 『授業で使える!教師のための ChatGPT 活用術』. 学陽書房.

12 月　特別講演会

日時：2024 年 12 月 14 日（土）16:00～18:00
場所：オンライン (Zoom) 開催
共催：言語系学会連合・全国英語教育学会

テーマ：「AI 時代に英語教師の存在意義はあるのか？―認知言語学の視点から―」
講演者・報告者：町田　章先生（日本大学）

AI 研究の発展によって英語教育・学習を取り巻く環境は劇的に変わった。英語の教授や評価に便利な道具が次々に開発されているだけでなく，効果的な自律学習を助ける手段も豊富に用意されるようになったのである。しかしながら，その一方で，AI 翻訳を使えば，そもそも英語学習そのものが不要になるのではないかという議論も巻き起こっている。

以前は，英語学習の必要性を疑問視する声は

あまり聞かれなかった。国際化・グローバル化が進む中でリンガフランカとして英語を学習することの意義は明らかだったからである。ところが，今後は AI 翻訳を介在させることで精度の高い翻訳が瞬時に行えるようになる。リンガフランカに代わる，新たな意思疎通の道具を人類は手にしたのである。もちろん，今後も外国語学習を必要とする者がいなくなるわけではない。しかしながら，仮に言語がコミュニケーションのためだけに存在するのであれば，外国語の学習の必要性は急激に減少するであろう。

しかしながら，言語にはコミュニケーション機能以外にも思考を構築するという重要な機能がある。そして，言語が思考の道具であり，それぞれの言語に特有の思考法（ものの見方・事象を捉える論理）が存在するのであれば，母語の呪縛から解き放たれるためにこそ外国語を積極的に学ぶ意義が見いだされる。異質な思考法を学ぶことによって，自らの思考法を客体視するのである。

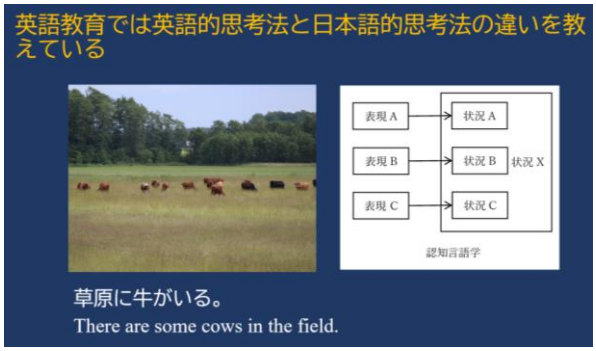


図 1：英語と日本語での思考法の違い

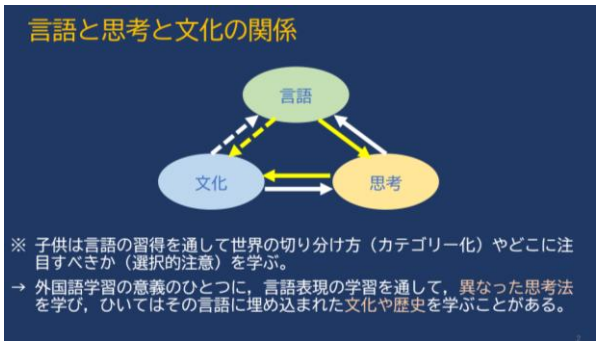


図 2：言語と思考と文化の関係

本発表では，文化を，翻訳を通しても学ぶことができる可視的文化（visible culture）と翻訳を通すと見えなくなってしまう不可視的文化（invisible culture）に分けたうえで，後者を学ぶためには外国語学習が不可欠であると主張した。母語の習得を通して受け継がれてきたその言語に特有の思考法である不可視的文化は，その言語を学ばない限り認識されないからである。

もちろん，不可視的文化を学ぶことに意義を見いだすならば，学ぶ言語は英語でなくともよい。実際，思考法の多様性という観点からは，より多様な言語を学ぶことこそ推奨されるべきであろう。それにもかかわらず英語学習に特別な意義を見いだすならば，それは，英語学習を通して世界標準の思考法を学ぶということになる。現在，人類が生み出す情報の蓄積はその大部分が英語で行われている。そのため，世界標準の情報（＝人類知）には強い英語バイアスがかけられていることになる。良し悪しは別として，日本人も英語学習を通してこの世界標準の思考法を知る必要があるのである。

今後どんなに AI 翻訳の精度が上がっても，完全な翻訳が可能になることは原理的にあり得ない。自然な翻訳は原語の思考法（＝不可視的文化）が抑圧されたうえで成り立っているからである。しかも，AI 翻訳が社会に浸透するころには，この種の抑圧はいっそう意識されなくなる。今後の英語教師の存在意義は，英語という言語を題材に，以上に挙げたような問題を陰に陽に学習者に示していくことにある。

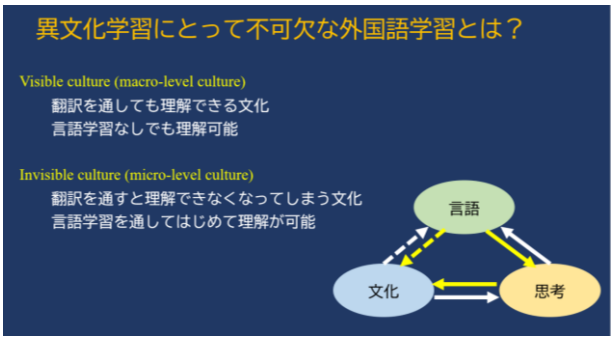


図 3：異文化学習と外国語学習

関東甲信越英語教育学会日誌

（2024 年 7 月～2024 年 12 月）

7 月 13 日（土）	月例研究会（16:00～18:00，学習院高等科マルチメディア教室） テーマ：「エデュテインメントが変える日本の英語教育―英語を諦めていたすべての日本人が言葉の壁・心の壁を打ち破る！―」 山中裕斗氏（ミントフラッグ株式会社　代表取締役 副社長 & COO）
8 月 16 日（金）	第３回運営委員会（13:00～14:30，オンライン開催）
8 月 16 日（金）	関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会実行委員会 （15:00～16:30，オンライン開催）
8 月 17 日（土）	関東甲信越英語教育学会理事会（11:00～11:30，都留文科大学 [ハイフレックス開催]）
8 月 18 日（日）	関東甲信越英語教育学会会員総会（11:00～11:30，都留文科大学）
8 月 17・18 日（土・日）	関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会（都留文科大学）
10 月 6 日（日）	第４回運営委員会（13:00～15:30，オンライン開催）
12 月 14 日（日）	特別講演会（16:00～18:00，オンライン開催） 言語系学会連合・全国英語教育学会 共催 町田　章先生（日本大学） 講演『AI 時代に英語教師の存在意義はあるのか？―認知言語学の視点から―』
12 月 21 日（土）	月例研究会（16:00～18:00，筑波大学附属高等学校） テーマ：「公立中学校における生成 AI を活用した英語意見文指導の充実」 彦田泰輔先生（尾張旭市立西中学校）
12 月 22 日（日）	第５回運営委員会（13:00～16:00，オンライン開催）

表紙写真「関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会　都留文科大学」，p. 2「山梨研究大会　入口」，p. 3「都留文科大学キャンパス全体」，p. 4「尼寺圭悟先生の研究発表」，p. 5「講演会場　入口」，pp. 5-6「根岸雅史先生の講演」，p. 7「姉﨑達夫先生の研究発表」，p. 8「小林良裕先生の発表」pp. 9-10「藤原剛先生の発表」，pp. 10-11「相川美登利先生の発表」，p. 12「小林雄飛先生の発表」，pp. 13-14「田中知聡先生の発表」，p. 15「鈴木駿吾先生の発表」，pp. 22-23「山中裕斗氏の発表」pp. 23-24「彦田泰輔先生の発表」，p. 25「町田章先生の発表」

編集後記

◆本号は，関東甲信越英語教育学会第 48 回山梨研究大会を特集いたしました。

・2024 年度の山梨研究大会は，2019 年度の神奈川研究大会以来，5 年ぶりの対面開催でした。山梨研究大会では活発な議論や交流が行われ，改めて対面のよさを感じられる機会だったのではないかと思います。

・対面復帰初の研究大会となった山梨研究大会には，2 日間で延べ 210 名の方々に参加していただきました。山梨県でご活躍される小中高の先生方による授業実践報告，最新の会話型 AI をご紹介いただいた学会企画，「知識・技能」「思考・判断・表現」の評価を考える機会をくださったご講演，43 件の自由研究発表・実践報告が行われ，大変充実した学びの場となりました。ご発表・ご参加いただいた皆さま，山梨県の先生方，研究大会に関わった全ての方々に，心より感謝いたします。

・特別講演会や月例研究会などのイベントでは，発表者の方々に貴重なお話・議論の機会をいただき，ご参加が叶わなかった方々にも共有していただけるよう，概要・当日の様子をご寄稿いただきました。お忙しい中，誠にありがとうございました。

◆編集委員も研究大会に参加して，多くの発表を拝見，拝聴いたしました。以下は編集委員の感想です。

・この度，編集委員として KATE の研究大会に初めて参加させていただきました。講演や研究発表を通じて，最新の研究動向を知ることができたのはもちろんのこと，様々な分野の研究者の方々と交流できたことも貴重な経験となりました。さらに，研究大会を通じて得た視点を自身の研究や実践にどのように活かせるかを改めて考える機会にもなりました。これまで触れることのなかった研究領域にも関心を持つきっかけとなり，視野を広げることができたと感じています。今後も継続して学びを深めていきたいと思います。引き続き，どうぞよろしくお願いいたします。(M.F.)

◆2025 年度は，JASELE 第 50 回記念埼玉研究大会を KATE が主催する関係で，『KATE Newsletter』夏号（7 月）は休刊いたします。次号は 2025 年 3 月発行予定で，「2024 年度春季研修会」「JASELE 第 50 回記念埼玉研究大会」を特集する合併号となる予定です。また，2022 年度より，バックナンバーも学会ウェブサイト (https://kate-jp.sakura.ne.jp/category/katenewsletter/) で公開しておりますので，そちらもぜひご覧ください。

2025 年（令和 7 年）3 月 10 日　No. 121
発行者　関東甲信越英語教育学会　代表者　西垣知佳子（千葉大学）
事務局　〒184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１
東京学芸大学　臼倉美里
学会ホームページ　https://kate-jp.sakura.ne.jp/
編　集　関東甲信越英語教育学会編集委員会
［委員長］　森　好紳（email: ymori@fc.hakuoh.ac.jp）
［副委員長］　田中菜採
［編集委員］　青木重憲　樫村祐志　神村幸蔵　小室竜也
佐々木大和　佐藤連理　鈴木健太郎　塙千賀子
福光将仁　細田雅也　水書　亮